

内村鑑三と日本人の心性

「私に愛する二個のJがある、その一はイエスであつて、その他のものは日本である。イエスと日本とを比べて見て、私はいずれをより多く愛するか、私にはわからない」といふほどに日本を愛し、日本人の精神的伝統を重んじて、たとえば「われらは人生のたいいての問題は武士道をもつて解決する。∴武士道を捨て、またはこれを軽んずる者が、キリストの善き弟子でありようはずがない」と言い、「恩恵の露、富士山頂にくだり、したたりてその麓をうるおし、あふれて東西の二流となり∴」と日本の天職をうたいあげた内村鑑三は、もつとも日本人らしい日本人、まさに『代表的日本人』のひとりであつた。

このことにいささかの異論はないとしても、しかし、この代表的日本人のイメージは、一般の日本人が抱いている「典型的日本人」のイメージ、あるいは、こんにち巷間にやかましい日本人論のなかでうんぬんされている日本人像と、なんとちがうことであらう。いやむしろ、なんと決定的に対立したイメージであることだらう。

この相違のよつてきたるところは、言うまでもなく、内村のキリスト教にある。彼はまじりけのない日本人の心をもつて、キリストの福音を受け入れた。そして、純粹な福音信仰を通して、日本人の心を見た。そこに、およそ日本の「よきもの」に対する内村の積極的評価があり、同時に、彼の日本文化に対する厳しい批判と、日本的心性の激しい否定とがあつたのである。

おなじことを、内村の「接ぎ木の理」によつて言えば、キリスト信者になるといふことは、台木である生まれつきの罪の人に、神の子キリストが接がれて、そこに、罪の人の悪しき実ではなく、神の子の善き実がみることである。したがつて台木に求められるところは、その質の良否ではなく、ただ強健にして、よく接ぎ穂の生命を吸収摂取することである。かくして内村によれば、日本人のキリスト教受容において、日本の精神的伝統に内在する特殊な価値は、キリストの生命によつていわば質的に揚棄され、全く新しい普遍的な価値へと転化される。と同時に、そこに創出される新しいエトスは、古い心性と決定的に対決せざるをえないものとなるのである。

アメリカにおいて回心を経験して帰国してから、北越学館における宣教師団との衝突に始まつて、第一高

等中学校不敬事件、目露戦争における非戦平和の主張、排日移民法事件におけるアメリカ攻撃、たび重なる肉親との不和、一貫して変ることのなかった教会主義批判、そしてついには死を前にしての弟子たちとの論争に至るまで、内村の生涯が文字通り「生くるは戦うなり」のそれであったことは、決してゆえなしとしないのである。

そして、愛するがゆえに激しく戦わざるをえなかった、内村の日本との戦いは、いまも決して終わったわけではない。いやむしろ、外形的には近代化が一応達成せられたかに見える現代の方が、この戦いは一段と困難で激しいものになったと言わなければならない。内村の福音信仰のエトスは、日本人の伝統的エトスと、どの点で、どのように相違し、対立しているか。内村の信仰的遺産に生きるわれわれに託された課題は、これを冷静、厳密に見きわめ、そのよってきたる源であるものの一層しつかりと生きぬくことであろう。

以下この点に関して、私が最近ごくひきんなことから、あらためて感じさせられていることの一端を申し述べてみたい。

ペンダサンの『日本人とユダヤ人』いろいろ、外国人

による日本人論がさかんだが、雑誌「みすず」(五月号「海外文化ニュース」)によると、こんどはルネ・ロランサンというフランス人神父が一書を上梓し、その半分をつかって日本人を論じているという。少々長くはなるが、そこにのっている日本の宗教に関する統計を引用させてもらおうと……

まず、一九六七年の文部省の統計によると、日本の人口は一億少々であるのに、さまざまの宗教信者の総計は一億六千万余になる。しかも、そのうちの六六ないし七〇パーセントは無神論者だということ。ところが、それにもかかわらず日本人のなかには漠然たる宗教心がきわめて強く、五二ないし七〇パーセントの人が、ときおり祈ったことがあると回答している。キリスト教についていうと、一九七〇年の統計で、宗派所属のキリスト教徒は人口の〇・七パーセント約七〇万にすぎないのに、自称信徒は三百万にも達し(その中には無教会信者も含まれているのかもしれないが、むしろ大半は心情的キリスト教同調者であろう)、クリスマスには二〇万の非キリスト教徒が教会に集まり、信徒でもないのに教会の結婚式を望むものがたくさんいる。かくして著者は、「経済成長、貯蓄などのほか、宗教心という点でも、日本は記録破りの国ということにな

るのだろうか」と驚いている。

この客観的な数字は、それが客観的であるだけに、かえってよく日本人の宗教心を反映している。それは宗教における混合主義であり、およそ超越というものを知らない日本の心情である。そしてこの宗教心は、たとえば、エーリツヒ・フロムの著書がすべて翻訳されて広く読まれ、ヒルティ、シュヴァイツァー、トインビー、ラッセル、ロランというような人たちが、その思想的相違を問うことなく、おしなべてヒューマニストとして受けいれられ、それぞれの名を冠した会まであるという現象に示される、日本人の知的、思想的包容性と、無縁のものではないであろう。

こうした精神的土壌（その中に、教会と無教会とを問わず、信者と称するものまでが、容易にのめりこんでいく。）のなかで、次のような内村のことはよむと、その信仰的エトスがいかに非「日本的」であるかが、実にあざやかに浮びあがってくる。

人の知るごとく、私自身は仏教徒にあらずしてキリスト信徒である。ローマ・カトリック教徒にあらずしてプロテスタント主義者である。教会信者にあらずして無教会信者である。私は、人が、この明白なる理由のために私を憎むならば、憎んでもらいた

い。愛するならば、愛してもらいたい。敵に愛せらるるは、味方に憎まるる以上の不幸である、ギリシヤ語の、*diarisis* 英語の *discernment*, *clear thinking*、弁別、信仰上、こんなに大切なるものはないのである

札幌において、あの北海道の原野さながらの単純で素朴な「ひとつの教会」を始めたその時から、内村はイエスの弟子に分派があるべきではないと堅く信じていた。しかし、その彼は、むしろそのことを堅く信じるゆえに、社会と教会は言うに及ばず、あえて時には弟子たちとのあいだにまで、厳密な原理的思考と、激しい対決精神とをもって、信仰の徹底的な弁別を固執したのである。内村の信仰を無教会信仰というとするば、実にこの点にこそ、その本質があると言わねばならない。

『後世への最大遺物』といえ、多くの人がそれによつて人生を生きる勇気を与えられてきた古典的名著だが、それでも内村はよく「みんな『最大遺物』くらいで満足してしまつて、キリストのしもべになろうしない」と言つて嘆いたという。ところが、私は最近これを讀んだ若い人たちの読後感を聞いて、そこに語られる高く、深く、うるわしく、喜びにあふれた人生観

さえもが、もはや必ずしも彼らの心に訴えなくなってしまうていることを知り、索漠たる思いを禁じえなかつた。そしてそれはなぜだろうかと考えたとき、若い人たちが現代社会に特有の深刻なニヒリズムに、いかに深くむしろ生まれかを思わされるとともに、この無力感、実はむしろきわめて伝統的な日本の心情の現代的発現にすぎないのではないかと思いついた。

日本人に固有ともいえる、この虚無的心性を、一言にして言いつくすことは難しいが、私はそれを「倫理的天然主義」とでも名づけることができるように思う。それは、自然であること、あるがままであることが一番いいことだ、という考え方である。「人間はもともと弱いもの、怠惰なもの、自己中心の考え方がらぬけられないもの、それがあるがままの人間の姿なのだから、それでいいではないか。なにをすきこのんで自らを律し、かく生きねばならぬなどと気張るのか。それこそ偽善（内村とそのキリスト教は、なんとしばしばこの名をもって非難されたことであろう。）というものではないか。」

こうした精神的風土（それは陰湿で、情緒的で、女性的で、唯美的な風土だ。）こそ、内村の信仰的エトスとは全く異質のものであり、彼が身ぶるいしてそれ

から遠ざかり、断乎として拒否し、くりかえしくりかえし攻撃、批判してやまないものであった。

それが「天然を愛すべし。されども天然にあこがるべからず。天然を愛して神と義務とを忘るべからず。天然をして、仕うる霊たらしむべし。彼をして、誘う友たらしむべからず」とする内村の天然観となり、源氏物語を軟弱文学としてしりぞけ、「文学というものは、われわれの心に常にいざいざしているとこの思想を後世に伝える道具に相違ない。それが文学の実用である。文学はわれわれがこの世界に戦争する時の道具である」という彼の文学観となり、「義これ美なり」として、「人間が人間である以上、義がすたれて美のみが権威をふるう時のいたりようはずはない」と断言してはばからない、彼の芸術観となり、不義と罪に對して怒ることをしないキリスト教はキリスト教にあらずとする「男性的キリスト教」の唱道となるのである。

また内村はルカ伝十四章二十六節を注解して、「（肉親を）憎むとは、情実の覇絆を断つことである。すなわち最も乾燥せる眼をもって彼らの利益を見ることである。すなわち彼らの希欲のなされんことを望まずして、彼らに関する神のみこころの成らんことを欲することである」と書いている。この「最も乾燥せる眼」

、最も醒めた意識こそ、日本人の情緒的血縁関係を断ちきり、陰湿な「イエ・ムラ共同体」的人間関係をつきくずして、そこに全く新しいキリストの共同体（エクレシア）を形成するエネルギーとなるものであろう。次にかかげる「罪の処分」と題する一文は、この内村の信仰的エトスの秘密がどこにあるかを語って余すところがない。

罪はこれを見留めざるべからず。されども、これを見つむべからず。罪を見留めずして、人はこれを脱るあたわず。これを見つめて、その捕うるところとなる。罪を見留めずして、その中に死すもの多し。罪を見つめて、その殺すところとなる者少なからず。悔改めは悔いなき救いを得しむるの悔改めならざるべからず。死に至らしむるの悔改めなるべからず。：：：そうして、七十年の戦いの果てに、その生命のすべてをふりしぼって、内村が次のように言うとき（遺稿）その信仰的エトスは、どんらんにあらゆる文化を吸収しながら、実に巧妙に超越者をしりぞけ、絶対なる者への拝跪と献身を頑強に拒んできた日本人の「相対的」心性と、絶対的に対立してしまうのである。

絶対的宗教

宗教は絶対的である。相対的でない。「なんじ、心を尽くし、精神を尽くして、意（こころばせ）を尽くして、主なるなんじの神を愛すべし」というのが宗教である。陝隘ならんことを恐れ、広量ならんことを欲して、右顧左眄、ただ円満ならんことをこれ求むるものは宗教でない。世界大宗教の一なるごとき顧るに及ばない。もし絶対的宗教を発見し得ずんば、信ぜざるに如かず、比較的に善き宗教は、信ずるの価値なき宗教である。かく言いて、他宗はことごとくこれを排斥せよと言うにあらず。寛容は、絶対的宗教の特質である。他は他たり、われはわれたりである。われはわが宗教をもつて充ち足れる者である。他宗をもつてこれを補うの要なし。これはわれにとり、比較以外のものである。あたかも一夫一婦の規定のごとくである。

（所載） 「聖書之研究」復刻版月報 27

一九七二年一月

一九七二年聖書之研究復刻版刊行会